

KANI PUBLIC ARTS CENTER ala

MACHI GENKI PROJECT

ala まち元気プロジェクトレポート

2019



To See You, At Last

www.kpac.or.jp/machigenki/

コロナ禍のあと、 私たちはどのような社会を望むのか？

可児市文化創造センターala 館長兼劇場総監督 衛 紀生

「ひとりぼっちの私は、私たちになった」

alaと英国のLeeds Playhouseとの日英国際交流事業『To See You, At Last』。ラストシーンで日英の子どもたちが声を張って客席に渡す台詞です。

8月初旬、稽古場に英国からの子どもたちがやってきました。当然、すぐには溶け合うことなく、とくに日本の子どもたちは怖気づいた表情で固まっていました。それから10日程度経って、演劇ロフトでの最終公演で前掲のセリフを、はち切れんばかりの思いを言葉に乗せて言ったあと、観客の拍手に包まれながら、彼らは抱き合って泣き始めました。プロの役者ではありえないことですが、演劇経験のほとんどない彼らだからこそ、突き上げてくる達成感と客席からの共感の拍手に、素の自分たちの思いに素直に身体が反応したのでしょう。固まっていたあの子たちが、心から溶け合ってひとつにつながっている、と私は熱くなりました。

現在、世界中がコロナに覆われています。そして、政治も経済も医療も、社会のあらゆる制度が、民主主義さえも機能不全に陥っています。フランスの経済学者で世界の英知と言われるジャック・アタリは、リーマンショック後の2冊の著作で「壊滅的なパンデミック」の到来を予言しています。そして、私たちはその危機から何を学び、どのような世界をつくるのかという大きな問いを投げかけています。コロナ禍によって、私は「いまだけ、金だけ、自分だけ」の利己的な価値観で

行動して、差別と偏見を助長して、社会を分断する種子を撒き散らしている人たちがいかに多いかを思い知らされています。このような状況に追い込まれると、いろいろな歪みが露わになります。機能不全になっている制度も、平時にはやり過ぎしていたのですが、危機的な世界になると、それが普通の生活を営むうえで信じられないほどの阻害要因となることが見えてきます。私たちと私たちがつくってきた社会が、いま試されているのです。

私は『To See You, At Last』の子どもたちの、溶け合う純粋な気持ちと姿からたくさんのことを学びました。コロナ禍の前で「分断」に身をまかせるのか、「つながりと連帯」を選び取るのか、そんな人間の生き方までも、彼らから教えられました。私たちが望む社会とは、「つながり」のある、足りないところを補い、支えあう社会です。間違いなく私はコロナ禍のあとの社会に体温のあるそういう世界を望みます。ジャック・アタリは危機の後の社会は「利他的な精神」に裏打ちされた世界をつくるべきと結んでいます。彼は誰かのために生きるということを「究極の利己主義」と書いています。誰かのために生きることで、その人に「幸福感をもたらす」という行動経済学の知見を言っているのです。



可児市文化創造センター ala



リーズ・プレイハウス

ala×Leeds Playhouse

可児市文化創造センターとリーズ・プレイハウスは、ともに＜高水準の舞台製作＞と＜地域社会の健全化＞を基本理念に持ち、地域の全ての人々に向けた「生きがい」や「居場所」の創出に取り組んでいます。国境を越え同じ志を持つ2つの劇場が、2015年3月にグローバル提携を結びました。人事交流や舞台作品の共同制作などを通じて、人々にさらに愛される地域劇場として共に歩んでいきます。

感動と希望を生み出す
舞台製作

人と人をつなげていく
コミュニティづくり

生きづらさを解消する
セーフティーネット



日英共同制作公演「野兎たち～MISSING PEOPLE～」



「英国人講師による学校演劇ワークショップ」



日英国際交流事業「To See You, At Last」



aLa MACHI GENKI PROJECT 2019 COLLECTIVE IMPACT MAP

多文化
Multicultural

多様性
Diversity
相互理解
Mutual understanding
つながり
Relationship

地域
Regional

自分磨き
Improvement
コミュニティ
Community
災害
Natural disasters

高齢者
Senior citizens

認知症
Dementia
孤立
Isolation
健康寿命
Healthy life expectancy

劇場
Theater

文化政策
Cultural policy
マーケティング
Marketing
人材育成
Human resource management

若者
Youth

体験
Experience
まちづくり
Community development
国際交流
International exchange

家族
Family

共通の思い出
Mutual memories
社会的相続
Social inheritance

障がい者
Handicapped

体験
Experience
個性
Individuality
バリアフリー
Accessibility

子育て
Parenting

ひとり親家庭
Single parent
孤立
Isolation
体験
Experience

子ども
Children

体験
Experience
自己肯定感
Self affirmation
自発性・協働性
Spontaneity・Cooperativeness
貧困
Poverty

合計	
実施回数	505回
うち古き実施回数	60回
参加者数	延べ 10,113人
集客数	6,729人

●=主な連携団体

1 日英国際交流事業「To See You, At Last」プロジェクト

日英の若者たちが「嬉しい、悲しい、出会い」をテーマに彼らの等身大の言葉を紡ぎ出し、演劇として発表公演を行う。

報告日程
日本チーム 6/6~8/1 (計11回)
日英合同報告 8/3~11 (計8回)
①6/22(日本チームのみ)
ファミリーアーツ・スタジオ(助産)
②8/10(合同)
あうるすぽっと3階会議室(助産)
③8/12(合同)
ala・演劇ロフト

参加人数 ①34人 ②75人 ③82人
出演者 日本チーム:6人、英国チーム:8人
演出 アレックス・フェリス、藤井さう
主催 ala、Leeds Playhouse
共催 あうるすぽっと(公益財団法人しまふく文化財団)
協力 NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク



先行きが見えない社会に不安や孤独を抱えている若者たちが多く存在しているのは、日本だけでなくイギリスも同じ

—— アレックス・フェリス(クリエイティブ・エンゲージメント部長/リーズ・プレイハウス(LP))

日英の若者たちが自分たちを取り巻く環境に着目し、演劇交流するなかで、居場所や希望を見出せるプロジェクトをつくる。この企画は英国リーズ・プレイハウスのアレックスさんからの発案で生まれました。

6月、日本チームはまず、さまざまな家庭環境にある子どもたちがプロジェクトに参加できる環境やサポート体制を整えるため、子ども達の居場所づくりの先駆者として知られる豊島子どもWAKUWAKUネットワークの栗林知絵子さんに協力を求め、都内在住の中高生を中心とした6人が集まりました。

演出は戯曲作りにも定評のある藤井さうさん。<嬉しい>と<悲しい>をテーマに、若者たちの等身大の言葉がそのまま戯曲に取り入れられました。ラジオDJが進行し、「日常あるある」をテンポよく見せたかと思えば、緊張の面持ちでの独白があったりと、会場が思わず笑いそして涙する作品に。

7月、一方の英国チームは、オーディションにより8人の若者たちが選ばれました。演出は、このプロジェクトの発案者でもあるアレックスさん。テーマは<出会い>。日常のふとした出会いや、友情、愛情の出会い、想定外の出会い

など、心臓の鼓動がリズム化したようなBGMを効果的に駆使した動きのある作品を作り上げました。

8月、それぞれの作品を携えて、日英両チームが東京で初対面。初日のごちんさは横吉が進むにつれみるみる解消されていきました。演劇とはコミュニケーションで作り上げる共感の芸術。互いの言葉が通じない分、身振り手振りで何とか相手に伝えよう理解しようと思死になります。思いの強さに比例して結びつきも強くなっていく様は、まるで自分達で新しい言葉を作っているような、彼らにしかできない表現を生み出している姿でした。

「ひとりぼっちの私は、私たちになった。」

このプロジェクトだからこそ生まれた、物語のラストに出演者全員で言うセリフです。東京公演を経て最終地となるアールで、彼らの絆は最高潮に達し、客席からは称賛の拍手が鳴り響きました。公演が終われば、彼らはまた別々の道へと旅立っていきますが、誰かとの出会い、つながり、支え合うことで、人は大きく強くなれるということを教えてくれました。

2 英国人講師による学校演劇ワークショップ



英国式の演劇教育プログラムを実施。子どもたちの表現力、コミュニケーション能力、創造力、チームビルディング能力を養いながら、ネイティブな英語体験。

日 期 1/14~1/17 (計8回)
会 場 東区中学校、東山小学校、今渡北小学校
参加者 263人
関 係 ジェマ・ウォッフィンデン (Leeds Playhouse)
アシスタント 山田久子、原口知重、青木万恵子
通訳 石井麗子 (文学座特選)

その他 1/13 にワークショップリーダー入門講座を開催。
ala 演劇口フット 一般参加者26人
協 力 可児市教育委員会、かにかこ英語サポーター



講師に、演劇教育の本場英国リーズ・プレイハウスからジェマさんを招き、レオ・レオーニの絵本「スイミー」を題材にワークショップを実施しました。最初は戸惑っていた子どもたちですが、苦えのない面白さにだんだん意きつけられ、積極的意見を出すようになります。その意見をジェマさんはどんどん採用し、次のプログラムに組み込んでいきます。今回の「スイミー」のポイントは、スイミーを除くキャラクターたちがクラスで演じられていること。大きな黒い魚、赤い魚たち、チームに

よっては海やナレーションもあります。そのため、言葉と体を使ってクラスメートとイメージを共有することが重要になってきます。最後に「スイミー」を発表するにあたり、これまでのプロセスで作った表現を今度はどう「見せる」のか、チームで10分ほど話し合いと稽古を経て本番を迎えます。できあがった作品はどのチームも全く表現の異なるオリジナルの「スイミー」が生み出されました。

3 日英共同制作公演「野兎たち」サポーター活動



演劇制作の現場を市民が得意分野で支える活動。広報宣伝活動、稽古場ケータリング、お楽しみ企画の開催など。

日 期 1/8~2/29 (計25回)
会 場 ala演劇口フット、製作室ほか
参加者 市民サポーター19人 延べ163人



アキラが初めて国際共同制作公演に挑戦した演劇公演「野兎たち〜MISSING PEOPLE〜」。パートナーとなった英国リーズ・プレイハウスは、(高水準の舞台制作)と(地域社会の健全化)を基本理念に掲げて多角的に活動している劇場で、2015年3月にアキラと提携契約を結びました。そして今回、両国のスタッフやアーティストが互いの文化活動を学び、地域コミュニティにおける劇場の役割について共有する機会として、共同制作する運びとなりました。

本作は、英国での戯曲賞受賞歴もあり活躍著しい劇作家ブラッド・ソーチが日本を取材し、可児を舞台に書き下ろした家族劇です。ここ可児でキャスト・スタッフとともに日英混合チームが約1ヶ月間滞在し、日本語と英語が飛び交う現場で制作されました。出だしは、言葉の壁、文化の違いから稽古の進め方、段取りも全く違うといった感じで、戸惑うことが多い制作現場。そんな中をアットホームな雰囲気ですべてサポートしてくれたのが、市民サポーターの皆さんです。稽古から本番までのケータリング準備や差し入れ、交際会など、制作現場をサポートする活動、そしてチラシ・ポスター配り、広報看板の作成などの公演の広報宣伝など、多岐に渡りサポートをしてくれました。

カンパニーTシャツ作成にも挑戦!

今回はカンパニーTシャツの作成にも挑戦。キャスト・スタッフ合わせて計60枚のTシャツをシルクスクリーンで作成しました。オリジナルのロゴが一番映える場所はどこか、きれいにインクがのるにはどうしたら…試行錯誤しながらの作業でした。出来上がったカンパニーTシャツをサポーターからキャスト・スタッフにお渡ししました。英国ではこのような活動はないそうで、サポーターの温かい気持ちにふれ、皆さん感激していました。この手作りTシャツが、「ファミリー」としての絆を固めるアイテムになりました。



可児市文化創造センター・リーズ・プレイハウス
日英共同制作公演

野兎たち
MISSING PEOPLE

“個”に生きる現代人の孤独を、
日英の才能があふりだし、
人々の幸福の在り方を問う、家族の物語。

今回の日英共同制作「野兎たち」はグローカル提携のいわば結晶のような作品です。社会包摂を経営理念の軸の一つに位置付けている劇場同士による初の舞台作品。生きづらい社会を背景にした「新しい家族劇」が誕生しました。



公演特設サイト

4 ala×ALRA「若き演劇人のためのシアターキャンプ」

英国を代表する演劇学校ALRAの講師や学生たちと共に「演劇人の社会的役割とは何か」を実践的に学び、じっくりと語り合える2泊3日のスペシャルキャンプ。

日程	シアターキャンプ 10/12～14 小学校ワークショップ 10/8～10	講師	クリス・ヒル(演出家・ALRA講師)
会場	シアターキャンプala 演劇ロフト 小学校ワークショップ:南郷小・麓山小	協力	可見市教育委員会
ゲスト	ALRAメンバー 5人(講師1人、修士3人、通訳1人)		
参加者	日本人 9人(演出家・俳優7人、学生オブザーバー 2人) 小学校ワークショップ:児童・生徒 82人		

「シアターキャンプ」は、プロの俳優や演出家が原点に立ち戻って自らの演技術や演出方法を確認し、新しいメソッドを発見するために試行錯誤する、強化合宿のような試みです。

この企画は、英国・マンチェスター近郊のウィガンに本拠を置く演劇学校アルラ・ノース(Academy of Live and Recorded Arts, North)の演劇修士生たちが海外研修プログラムの一環として来日し、10月12日から3日間で行われました。日本からは30名ほどの応募者の中から選ばれた7名の若き俳優・演出家が可見市に集結。フィリピン出身の高校生とアール・ユースシアター出身の音大生がオブザーバー参加しました。

英国における俳優の「身体訓練術」とコミュニケーション能力を量かにするための「ワークショップのファシリテーション流」が同じ根っこから

派生していることをプログラムを通じて実感しました。ワーク後の交流会でも日英両国の若い演劇人たちがそれぞれの国の社会状況・演劇文化について熱いディスカッションを交わす姿が印象的でした。

アルラのメンバーは約2週間可見市に滞在し、小学校でのワークショップを行うほか、宅名所で高齢者との茶話会に参加したり、地芝居で有名な美濃歌舞伎博物館・相生座を見学したりと、日本文化を様々な側面から体験しました。

こうした取り組みを通して、未来を担う若い世代が演劇人として、培ったスキルを活用して地域の課題解決へと向かうことを願っています。



▲シアターキャンプ風景①



▲シアターキャンプ風景②



▲麓山小アウトリーチ

5 世界劇場会議国際フォーラム

海外から劇場・文化芸術関係者を招聘し、日本人ゲストとともに、これからの時代の文化芸術、公共劇場の在り方について議論をする。

日程	1/30・1/31 ala小劇場	参加人数	ala 141人、さいたま71人
会場	2/4・2/5 さいたま市文化センター 多目的ホール	共催	NPO法人世界劇場会議会館市館 ※さいたまフォーラムは主催:(公財)さいたま市文化振興事業団
ゲスト	セーラ・ジー、カス・ラッセル、ジョナサン・ハーバー、 中村美恵、原林知枝子、藤井美恵、前田有作、河合さつき		

今回のテーマは「文化芸術の社会包摂」、その社会的価値をとらえなおす～芸術の啓蒙ではなく、持続可能な社会のグランドデザインとして～」。文化・芸術関係者が集い、これからの時代の文化芸術、公共劇場の在り方について議論しました。

イギリスに限らず日本の文化政策においても社会包摂事業は、公共劇場にとって必須ものになっています。こうした事業が真の意味で社会の課題に立ち向かうものになっているのか、社会とその新しい価値を共有できているか、私たち劇場関係者は、自分たちの社会的な役割を再認識し、事業評価していかなくてはならない、そう実感させられるフォーラムとなりました。

中村美恵さん
(九州大学/ソーシャルアートラボ)

人の存在や行動が経済的な価値のみ測られると生きづらい社会になっていく。文化芸術による社会包摂事業は多面的な価値観を社会に担保するのにも有効であり、それを社会にもっと広めていくことが重要である。

カス・ラッセルさん
(ハレ・賢治楽団/リーズ・プレイハウス)

社会包摂のプログラムは常に他者との対話をしながら改良改善に努めている。共感してくれる人・支援してくれる人がでてるよう仕組みをつくる必要がある。

セーラ・ジーさん
(コンサルティング会社/インディゴ/スプリングフィールド・ミュージック)

学校や病院などで行う社会包摂事業は、公演よりも市民の生活を変えるもの。でも劇場のHPをみても公演ばかりの宣伝になっている。もっと劇場や文化芸術団体が行う社会包摂事業を可視化し、社会に発信する必要がある。

報告書の
ダウンロードは
こちら



6 文学座と作る子ども向け紙芝居

地域拠点契約
文学座

文学座の演出家を講師に迎え、親子で楽しめるオリジナル紙芝居「いっすんぼうし」「おむすびころりん」を制作し発表会を行うワークショップ。

日 程	オーディション 4/20 演出 4/21～5/12(計8回)	参加者数	168人
会 場	ala 演劇練習室	参加者	参加者13人、サポーター5人
公演	5/19(計4回)	観 衆	高橋正徳(文学座・演出家)



アイデアの数は無限大!

文学座の高橋さん先導のもと参加者の想像力が爆発! 語りを暗記するだけでなく、紙芝居のイラスト、小道具の準備、演出プランまでを全員で考えました。何を伝えたいのか、どうしたらお客様に伝わるのかということ、自分たちで整理し、参加者の「伝える力」がグングン伸びて形になっていきます。最終的に一般的な紙芝居とは一味も二味も違ったオリジナルの紙芝居が完成! 発表会本番では、地域の子どもたちが集まり大盛況となりました。



アール紙芝居一座

2015年度に文学座朗読ワークショップに参加した市民を中心立ち上げたアール・オリジナル紙芝居一座。地域の子ども達のために児童センター等で出張公演を開催。

日 程	稽古 8/2～2/29(14回) 公演 8/2, 11/16, 12/15, 12/21(4回)	参加者数	270人(計4回)
会 場	8/2 旭小学校/旭地区キッズクラブ 70人 11/16 泰山公民館/泰山地区の親子 20人 12/15 alaレセプションホール/多国籍の親子100人 12/21 親子児童センター/クリスマス会に参加の親子 80人 ※3/1 ala 演劇練習室公演は、コロナウィルス感染拡大防止のため、公演中止。	参加者	アール紙芝居一座メンバー14人、新べ252人

“飛び出る”紙芝居で地域の児童センターや地区センターなどで大人気

上記の「文学座と作る子ども向け紙芝居」に参加した3人がメンバーに加わり一座は14人体制! そのワークショップの際に制作した「いっすんぼうし」「おむすびころりん」もレパートリーに加わり全7作品。市内施設3か所での公演のほか、アールの「多文化共生プロジェクト」とコラボし、紙芝居を初めて体験する、外国籍の子どもとその家族に観ていただくことができました。



7 新日本フィルハーモニー交響楽団 おでかけコンサート

地域拠点契約
新日本フィル

新日本フィルメンバーが地域に出向き、クラシック音楽を身近に楽しんでもらうコンサートを開催。楽器の体験やコラボ演奏も。

日 程	6/12・6/14・6/19・6/20・6/21
会 場	高齢者福祉施設(春風苑、アルメリア、フローレ川合、 可児とうのう病院附属介護老人保健施設)、 可児特別支援学校、広見小学校、可児とうのう病院
参加者	上記の児童生徒、入居者 510人

演奏者	〈弦楽五重奏〉 ヴァイオリン:ビルマン樹平、田村直典 ヴィオラ:高橋正人 チェロ:多田麗王 コントラバス:藤井将矢 〈弦楽四重奏〉 ヴァイオリン:竹中真央、澤田和康 ヴィオラ:高橋正人 チェロ:矢野晶子
-----	---

コミュニケーションを軸にし、子ども達に多角的な視点を見出す

単に音楽を鑑賞し、クラシックファンを育成する出張コンサートではなく、「音楽を体験すること」を通して、子ども達に多角的な視点、可能性を見出すことを目的とし、コミュニケーションを主軸にしたプログラムを実施しました。今回は児童用のヴァイオリンとチェロを用意し、実際に楽器を手にして音を鳴らしてみること、楽器の構造、音の出るメカニズム、きれいな音色を出す難しさなどを体験しました。最後に子ども達が授業で習っている「いつでもあの海は」の合唱。あるクラスの担任の先生は、自前のトランペットを持って登場し、子供たちも初めて見る先生の演奏に大喜び一緒にセッションをしながら音楽のコミュニケーションが生まれていました。「楽団員の皆さんと一緒に演奏できるなんてとっても嬉しかったです。」とピアノで伴奏した児童が感想に書いてくれました。子ども達が生演奏に触れる機会は、それぞれの家庭環境に左右されてしまいます。今後こうしたアウトリーチ活動で、演奏者が教育現場に訪問することで、ダイレクトに子ども達に音楽に触れる機会を提供していきたいと思っています。

劇場に來れなくても、alaから感動をお届け

老人ホームの入居者、病院の入院患者など、外に出かける事が難しい方々のもとに、新日本フィルメンバーがおでかけしました。お届けする曲はクラシックだけでなく、美空ひばりさんなどの昔の懐かしい名曲も。それに静かに聴き入るおじいさん、手拍子や掛け声をかけるおばあさん、なかにはビブラート付きで口ずさんでいる方もいらっしゃいました。高齢者施設で職員さんが、曲が終わることに片手が不自由な方に手をさし出し、2人の手で拍手をしていたのが印象的でした。



8 文学座俳優による子ども向け舞台「さるかに合戦」

地域拠点契約
文学座

文学座俳優と市民キャストで子どもたちが楽しめる舞台「さるかに合戦」を上演

日 程	精古 8/28～8/30	観客数	182人
会 場	ala 演劇練習室	参加者	参加者16人、延べ177人
公演	8/31-9/1 (計4回)		
出演	文学座俳優3名 (高柳剛子、相川幸博、大野青輔)、 市民キャスト15名		
スタッフ	台本: さいとうゆういち		



文学座俳優と市民キャスト、子どもたちの出会いの場

今回の文学座俳優による子ども向け舞台は、みんながよく知っている日本の民話「さるかに合戦」。3日間という短い稽古期間に台詞はもちろん歌と踊りも覚え、かつ子どもたちのための工作準備も全員で力を合わせて劇を作り上げます。本稽古には気心の知れたOne Teamに、直前に円陣を組んで4公演を子どもたちの笑顔と共にジェットコースターのように駆け抜けました。

9 新日本フィルハーモニー交響楽団員によるオープン・シアター・コンサート

地域拠点契約
新日本フィル

障がいのある方、小さなお子さまなど、普段劇場に足を運ぶことが難しい方でも安心して楽しめる、誰にでもオープンなクラシックコンサート。

日 程	6/13 (計2回)	出演者	ファイオリン: ビルマン龍平、田村直貴、竹中真入、藤谷まり、吉慶繁世 ヴィオラ: 高橋正人、矢浪礼子 チェロ: 多田麗王、弘田雅 コントラバス: 藤井秀夫 ピアノ: 宮本三太郎 パーカッション: 船橋広樹 五弦の福地西郎・団休、可児市教育委員会
会 場	ala 主劇場	場 力	
観客数	622人		

手拍子OK、歌ってOK、踊ってもOK!

クラシックからジブリ、日本のうた、アンコールでは「パプリカ」と多彩なプログラム。日本を代表するオーケストラの精鋭が、軽快なトークと共にしっかり音楽の世界を毎回奏しませてくれます。客席前方にはカーペット敷で、小さなお子様連れでも安心して楽しめる「のびのび鑑賞席」、車いす席も多数用意しました。小さな子と、そのすぐ後ろに座っていた障がい者施設の学生さんがとても仲良くコミュニケーションを取りながら、一緒にコンサートを楽しんでいる姿が印象的でした。



10 みんなのディスコ

障がい、国籍、年齢、性別、全ての垣根を越えて音楽、ダンスでココロがつながる空間。

日 程	9/28	その他	9/13 可児学園にアウトリーチ 9/14 ala 研修室 ボランティア説明会
会 場	ala 音楽・演劇・美術ロフト	協 力	市民ボランティア17人、可児地区更生保護女性の会、多治見西高等学校ダンス部、大ナゴヤ大学
観客数	123人		
出演者	DJ: 飯井 隆介、MC: 川名 洋行 ACT: 多治見西高等学校ダンス部、川名 洋行、 Team 可児学園、ONES、JOY☆UP、みなふたFROM福井		

いのちが躍動する

今回は、県外の2団体とコラボレーションして開催しました。福井から、障がいがある子どもたちが音楽・ダンス・太鼓・舞台発表を行っている団体「みなふた」、そして名古屋を中心に新しい地域コミュニティづくりに取り組んでいる「大ナゴヤ大学」です。また、新たな取り組みとして、思い切り自分を解放できるように、ヘアメイク・仮装グッズの作成コーナーも設けました。初めてヘアメイクされる特別支援学校の高等部の生徒は、はじめ「校則があるからおしゃれできません」と話していましたが、「お休みの日は自由だよ」と伝えたら、嬉しそうにヘアメイクを

希望し、鏡に映ったカッコよくなる自分を見て、笑顔で話をしていました。ヘアメイクだけでなく、仮装グッズやバルーンアートを身に付け、いつもとは違った自分に変身してダンスフロアにいくと、全場のテンションはグングン上昇! 地元の高校生やボランティアスタッフとは、一般のお客さんもしっかりと、老若男女問わず、障がいがあってもなくても、あらゆる人が心と体を解放させて音楽に身を任せて躍動しました。



11 多文化共生プロジェクト「にぎやかなお葬式」

様々な異なる言葉や文化を持った人々が1つの舞台作品を作るプロジェクト。

日 程	インタビュー・稽古 6/29～9/21(14回)
公 演	9/22(計2回)
会 場	ala 演劇ロフト
観客数	126人
参加者	出演者 24人(ブラジル6人、フィリピン3人、ペルー1人、日本14人) サポーター4人(ブラジル1人、日本3人)
スタッフ	作・演出: 豊田由紀、演出助手: カズサ
協 力	多文化共生センター フレリア

今回の作品はお葬式が舞台。家族や友人に愛され天寿を全うしたおじいさんのお葬式に参列する人々。国により葬儀の仕方が異なるため、衝突が生じてしまう。参列者の一人が言う。「じいじはこんなことを望んでいない!」参列者たちは気づかされる。平たい気持ちには同じはずなのに…ルールやしきたりを慮るあまり、大切なことを忘れていたと…。そして物語の中で、少女が生きづらさを語ったことをきっかけに、参列者それぞれが抱える“悩み”が吐露されていく。本作はドキュメンタリー演劇の手法を取り入れ、参加者の声を作品にも反映したものにしています。

日本にきて2年。一生懸命勉強して高校は一般クラスに入ることができた。クラスが離れたことで仲がよかった同じ国の子どもたちが自分をのけ者にした。自分の努力や存在を否定したときもあったが、今は自分の夢に向かってポジティブに歩みだした。Mさん。

学校でのいじめから自己否定する日々だったが、セラピストの「君は井戸の底にいます。目はどこを向く? 上を向くよね。」という言葉がきっかけに井戸から抜け出すことができたVさん。

物語同様、実生活でも2人は将来の夢を叶えるべく今は前を向いて歩んでいます。この作品を通して、日本語にも自信を持てるようになり、将来の夢も思い出すことができたMさん。そしてVさんは次のステップに進むため、今回でこのプロジェクトを卒業するとのこと。物語の最後に登場する、彼が描いた大きなイラストは、私たちへのプレゼントのように感じました。



12 エイブル・アート展 ～にじむ思い・にじむ風景～

「エイブル・アート展」は障がいのある人たちが「生」の証として生み出した作品を「可能性(able=エイブル)の芸術」として紹介する展覧会。

3名の作家と可見市内支援学級児童・生徒による約60点の作品を展示。

日 程	【展示】7/17～24 【みんなのオープンアトリエ】7/20
会 場	【展示】ala 美術ロフト 【みんなのオープンアトリエ】ala 演劇練習室
集客数	458人
参加者	オープンアトリエ: 56人 松浦愛夢(片山工務)
出展者	栗田佳子(たんぽぽの家・アートセンターHANA) 古谷秀男(大和富永太極の家) 市内支援学級の子どもたち
企画・協力	企画: (一財)たんぽぽの家、(社福)わたぼうしの会 協力: NPO法人エイブル・アート・ジャパン (公財)岐阜県教育文化財団
共賛主催	可見市

新たな可能性を求めて!

エイブル・アート展は今回、アールでの作品展示の他に、2つの新しい挑戦をしました。その一つが、可見市子育て健康プラザmanoでの展示です。皆が自由に行き交うロビー、そして気分転換になればという気持ちも込めて学習スペースの壁に作品を展示しました。展示期間が終了し、そと作品を撤収していたときのこと、近くに座っていた中学生が作品を下ろすのを手伝ってくれました。自然に手を差し伸べることのできる、地域の子どもたちのさりげない優しさを嬉しく感じました。

誰がきても自由。何をつくっても自由。

新しい挑戦。2つ目は、オープンアトリエです。岐阜県障がい者芸術文化支援センターが実施している、障がいのある人やそれを支援したい人、誰もが創作を楽しめる場所として企画している事業で、今回、アールにもオープンアトリエを作っていただきました。この企画を楽しみにしていた1人が、アール常連のりゅうさん。りゅうさんはこのエイブル・アート展だけではなく、「みんなのディスコ」など、毎年色々な企画に参加しています。開催の前日からアールに来て、手描き看板作りの準備も手伝ってくれました。当日は太鼓作りという、りゅうさんオリジナル企画も持ち込んで、オープンアトリエを盛り上げてくれました。



▲manoの学習スペースにも作品を展示



▲オープンアトリエ



▲オープンアトリエ前日に作ったオリジナル看板を持ちりゅうさん。

地域の子ども・家族のために編

13 アーラみんなのピアノプロジェクト

▶「ピアノを弾きたい」という気持ちがありながら、家庭環境等の理由でそれを叶えることができない子どもたちにその機会を提供する。

日程 4月～2月 月・木・金の指定日(計83日)
会場 ala 演劇練習室
参加者 26人 延べ447人
協力 ピアノ講師・吉大生 17人
WSファシリテーター 1人



16 親子de仲間づくりワークショップ

▶同じような悩みを抱える子育て中のお母さん達が、孤立せず楽しく子育てできるような仲間づくり・居場所づくり。

日程 4月～7月、10月～12月の指定の水曜日(計21回)
会場 ala レセプションホール ほか
参加者 52組107名(延べ257組532名)
講師 新井英夫(俳優家、ダンスアーティスト)
Ten seeds(劇・あそび・表現活動)、アシスタント3人
協力 Fun Fan ala



19 音楽家の集い アウトリーチ

▶劇場にくることが難しいとされている小さな子どもたち、そしてその保護者に向け、こども発達支援センターくればよんにてコンサートを開催。

日程 5/15、2/6
会場 こども発達支援センターくればよん
参加者 132人
出演者 ピアノ・指揮:渡辺隆仁
ソプラノ:眞見真純
ヴァイオリン:古井 麻美子
チェロ:阿井裕二



alaで出会って楽しむ・学ぶ編

22 ROCK FILL JAM in ala

▶地元を面白くしたいと集まった若者たちが、音楽・アート・映画・クラフト・食を中心に、子どもから大人まで1日楽しめるイベントを開催。

日程 8/4
会場 ala 館内全域(劇場を除く)
観客数 1,600人
参加者 アーティスト・飲食店等 94組 282人
主催 ROCK FILL JAM 制作委員会
協賛 地元企業・団体 22



25 アーラ未来の演奏家プロジェクト

▶活躍中の演奏家2人が可児市で初共演。5日間の滞在期間中、様々な音楽交流プログラムを重ね、音楽を通じたコミュニティづくり。

日程 6/26 ～ 6/30(計27回)
会場 ala 英語ロフトほか館内、今道南小学校、土田小学校
参加者 延べ1,419人
出演者 チェロ:長谷川彰子、ピアノ:森池司
観客数 最終日コンサート 159人
コンサート 佐野秀典(市田・編曲家)
協力 可児市教育委員会



alaを通じて誰かのために編

28 アーラ映画祭

▶市民実行委員会が、映画館が無い可児において、多様な人が鑑賞できる機会と環境を作り、映画を通じた人の繋がりを支え、広げています。

日程 11/15～11/17(計8回)
会場 ala 小劇場
観客数 1,948人
スタッフ 市民実行委員29人 延べ228人
共同主催 アーラ映画祭実行委員会
ゲスト 「カメラを止めるな」
主演:濱津隆之 プロデューサー:市橋高治



29 劇場フロントスタッフ研修

▶劇場でお客をおもてなしするフロントスタッフの基礎知識を学べる、初心者向け養成講座と経験者フォローアップ講座。地域の人々の社会参加を促進。

日程 養成講座 7/28・8/25
フォローアップ研修 10/14
会場 ala 主劇場、音楽ロフト
講師 星乃もと子
(Theatre Management Plan Co., Ltd.代表)
参加者 延べ57名
協力 NPO法人alaクルーズ



15 児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ

▶市内小中学校の児童・生徒を対象に行うクラス単位のコミュニケーションワークショップ。

日程 4月～7月、10月～12月(計62回)
会場 市内小学校11校、中学校3校
alaレセプションホール
参加者 小中学生(14校61クラス) 1,898人
小中学校初任者(先生向け1回) 20人
講師 新井英夫(俳優家、ダンスアーティスト)
Ten seeds(劇・あそび・表現活動)、アシスタント3人
主催 可児市
協力 可児市教育委員会



17 ひとり親家庭ワークショップ「親子で楽しむワークショップ」

▶ひとり親家庭を孤立させないために演劇をツールとした親子ワークショップを実施。終了後には子育て世代の講師たちとの和やかな交流会も。

日程 1/26
会場 マーノ 健康スタジオ
参加者 19名
講師 植田真介、フットボール:浅野彩子、佐藤麻衣子
(俳優・文学座所属)
協力 可児市母子家庭福祉連合会



18 文学座おでかけ朗読会 ～父母への手紙～

▶文学座俳優が中学校に Outreach、一般の方が家族に宛てて書いた感謝の手紙や友達をテーマにした手紙を朗読。朗読後は生徒の感想を聞くなど交流会を実施。

日程 7/2～7/5(計8回)
会場 緑南中学校、中部中学校、西可児中学校、広徳中学校
参加者 794人
講師 山崎美貴(女優・文学座)
協力 可児市教育委員会



地域拠点契約
文学座

21 アーラ・イルミネーション

▶アーラで冬の思い出づくり。毎晩1期のお客様によるイルミネーション点灯式を開催。手作りランプを作るワークショップも実施。

日程 【点灯式】12/7～2/2(計50回)
【ランプシェードWS】12/7
会場 【点灯式】ala 水と緑の広場
【ランプシェードWS】ala 音楽ロフト
参加者 【点灯式】延べ319名
【ランプシェードWS】63組100名
協力 NPO法人alaクルーズ



23 歌舞伎とおしゃべりの会

▶豪華講師陣に加え、古典芸能の舞台で活躍する一流ゲストをお招きし、歌舞伎を様々な角度から学びながらコミュニティづくり。

日程 連年(計6回)
会場 ala 映像シアター ほか
参加者 505人
講師 菊池聖司、木ノ下裕一、中村樹高、山崎健
ゲスト 中村樹之助、美穂幸松、藤澤真由、豊竹清太夫
協力 可児歌舞伎



24 森山威男ドラム道場

▶可児市在住の日本を代表するジャズドラマー・森山威男氏によるドラム講座。受講生同士で世代を越えて刺激しあい、切磋琢磨。

日程 連年 毎週月曜日(計42回)
会場 ala 音楽ロフト
参加者 延べ276人
参加費 2/7・2/28 公開セッション165人
講師 森山威男
ゲスト 公開セッション:永武祥子、守谷美由貴、田中信正



26 平田オリザの「対話を考える」モデル授業

▶平田オリザ氏による演劇的手法を用いたコミュニケーションについて学ぶ授業。今回は高齢者支援の現場に従事する関係者に向けて実施。

日程 11/16
会場 ala レセプションホール
参加者 12人
講師 平田オリザ(劇作家・演出家)



27 ココロとカラダの健康ひろば

▶高齢者の孤立を防ぐために、仲間の輪を広げるコミュニケーションワークショップを実施。

日程 4月～7月、10月～12月の水曜日(計20回)
会場 ala レセプションホール ほか
参加者 50人 延べ323人
講師 新井英夫(俳優家、ダンスアーティスト)
Ten seeds(劇・あそび・表現活動)、アシスタント3人
協力 Fun Fan ala



30 私のあしながおじさんプロジェクト

▶地元企業・団体・個人の寄付により中学生・高校生へアーラの公演チケットをプレゼント。経済的支援を受けているご家庭を対象としたFor Familyも実施。

日程 7月～2月(計12公演)
会場 ala 主劇場・小劇場
参加者 観客者 延べ146人(内 For Family 85人)
協賛 27企業・団体・個人から 計1,180,000円
協力 可児市(福祉支援課)、可児市教育委員会(学校教育課)



劇場の在り方を再定義編

31 みんなの同窓会



▶ alaの市民参加事業にこれまで参加・協力いただいた方々による同窓会。思い出の詰まったアールで、再びふれあい親交を深めています。

日程 9/8

会場 ala 美術ロフト

参加者 54人

32 あーとま塾



▶ アーラの地域貢献・社会的包摂に関する考え方と具体例を題材に劇場関係者と意見交換し、社会機関としての劇場運営について学び合う。

日程 5/30・31 「文化政策」八木 匡、笹路 健
10/16・17 「社会包摂」早川悟司、野田大順、多田周平
2/1・2/2 「マーケティング」衛紀生

会場 ala 美術ロフト・音楽ロフト

参加者 延べ108人

協力 可児地区更生保護女性の会

33 町が元気になる処方箋



▶ ゲストと共にまちづくりについて話し合う公開座談会。今回は経済学の視点から「幸福」について話し合いました。

日程 11/16

会場 ala 音楽ロフト

参加者 40人

講師 平田オリザ(劇作家・演出家)
八木 匡(同志社大学経済学部教授)

“私たちのまち”が もっと元気になるために、 一緒に考えませんか？

アールは地域の課題に対して、様々な団体・機関・専門分野の方々と結びつきを強め、共に解決のアプローチを模索していきたいと思っています。こうした活動に関心のある方はお気軽にご連絡ください。

Tel:0574-60-3311 Email: info@kpac.or.jp

担当:顧客コミュニケーション室

「alaまち元気プロジェクト」 レポートを下記のサイトに掲載!



チェック!!

<https://www.kpac.or.jp/machigenki/>

可児市文化創造センター

alaまち元気プロジェクトレポート2019

発行:公益財団法人可児市文化芸術振興財団

〒509-0203 岐阜県可児市下恵土3433番地139